

三 モチモチの木①

登場人物の人がらや気持ちを考えながら読もう。

「おくびよう豆太^{まめた}」

全く、豆太ほどおくびようなやつはいない。もう五つにもなったんだから、夜中に、一人でせっちんぐらいに行けたっていい。

ところが、豆太は、せっちんは表にあるし、表には大きなモチモチの木がつっ立っていて、空いっぱいのかみの毛をバサバサとふるって、両手を「わあつ。」とあげるからって、夜中には、じさまについてつてもらわないと、一人じゃしょうべんもできないのだ。

じさまは、ぐっすりねむっている真夜中に、「豆太が「じさまあ。」って、どんなに小さな声で言っても、「しょんべんか。」と、すぐに目をさましてくれる。いっしょにねている一まいのふとんを、ぬらされちまうよりいいからなあ。

それに、とうげのりようし小屋に、自分とたった二人でくらしている豆太が、かわいそうで、かわいかったからだろう。けれど、豆太のおとうだって、くまとかみうちして、頭をぶっさかれて死んだほどのきもすけだったし、じさまだって、六十四の今、まだ青じしを追っかけて、きもをひやすような岩から岩へのとびうつりだって、見事にやってのける。それなのに、どうして豆太だけが、こんなにおくびようなんだろうか！。

- ・せっちん…べんじよのこと
- ・きもすけ…どきょうのある人のこと
- ・青じし…カモシカのこと

(光村図書「モチモチの木」より)

① 語り手は「豆太」のことをどう思っているでしょう。また、それはなぜですか。

② 「豆太」には、モチモチの木がどのように見えていますか。

③ 「じさま」は豆太のことをどう思っているでしょう。また、それはなぜですか。

④ じさまがどんな人物か分かる言葉を書きぬきましょう。

三 モチモチの木②

登場人物の人がらや気持ちを考えながら読もう。

「やい、木い」

モチモチの木ってのはな、豆太がつけた名前だ。小屋のすぐ前に立っている、でっかいでっかい木だ。

秋になると、茶色いぴかぴか光った実を、いっぱいふり落としてくれる。その実を、じさまが、木うすについて、石うすでひいてこなにす。こなにしたらやつをもちにこね上げて、ふかして食べると、ほったが落っこちるほどうまいんだ。

「やい、木い、モチモチの木い、実い落とせえ。」

なんて、昼間は木の下に立って、かた足で足ぶみして、いばってさいそくしたりするくせに、夜になると、「豆太はもうだめなんだ。木がおこって、両手で、「お化けえ。」って、上からおどかすんだ。夜のモチモチの木は、そっちを見ただけで、もう、しょんべんなんか出なくなっちゃう。

じさまが、しゃがんだひざの中に豆太をかかえて、

「ああ、いい夜だ。星に手がとどきそう。だ。おく山じゃあ、しかやくまめらが、鼻ぢようちん出して、ねっこけてやがるべ。それ、シイーツ。」

って言うてくれなきゃ、とつても出やしない。しないでねると、あしたの朝、とこの中がこうずいになっちゃうもんだから、じさまは、かならずそうしてくれらんだ。五つになって「シー」なんて、みつともないやなあ。

でも、豆太は、そうしなくっちゃだめなんだ。

(光村図書「モチモチの木」より)

① なぜ豆太は木に「モチモチの木」という名前をつけたのでしょうか。

② 豆太は「昼間のモチモチの木」に、どんなことをしていますか。

③ 「夜のモチモチの木」は豆太に、どんなことをしますか。(豆太の目線で)

④ 「そうしなくっちゃ」とありますが、それをしないでねるとどうなりますか。

三 モチモチの木③

登場人物の人がらや気持ちを考えながら読もう。

「霜月二十日のぼん」

そのモチモチの木に、今夜は、灯^{あかり}がともるぼんなんだそう^うだ。じさまが言った。「霜月二十日のうしみつにゃあ、モチモチの木に灯^{あかり}がともる。起きてて見てみる。そりゃあ、きれいだ。おらも、子どものころに見たことがある、死んだおまえのおとうも見たそう^うだ。山の神様のお祭りなんだ。それは、一人の子どもしか、見ることができねえ。それも、勇気のある子どもだけだ。」

「ーそれじゃあ、おらは、とつてもだめだー。」
豆太は、ちっちゃい声で、なきそうに言った。だって、じさまもおとうも見たんなら、自分も見たかったけど、こんな冬の真夜中に、モチモチの木を、それも、たった一人で見に出るなんて、とんでもねえ話だ。ぶるぶるだ。

木のえだえだの細かいところにまで、みんな灯^{あかり}がともって、木が明るくぼうっとかがやいて、まるでそれは、ゆめみてえにきれいなんだそう^うだが、そして、豆太は、「昼間^{ひる}だった^ら、見てえなあー。」と、そつと思っただけ^だが、ぶるぶる、夜なんて考えた^らだけでも、おしっこをもらしちまいそう^うだー。

豆太は、はじめっからあきらめて、ふとんにもぐりこむと、じさまのたばこくさいむねん中に鼻をおしつけて、よいの口からねてしまった。

①「霜月二十日のぼん」には、モチモチの木にどんなことが起こりますか。

②①を見ることができるのはどんな子どもですか。

③じさまの話を聞いて豆太はどうしてだめだと思ったのでしょうか。気持ちが分かる文を書きぬきましょう。

④①のときのモチモチの木はどんな様子でしょうか。

三 モチモチの木④

登場人物の人がらや気持ちを考えながら読もう。

「豆太は見た」

豆太は、真夜中に、ひよつと目をさました。頭の上で、くまのうなり声^①が聞こえたからだ。

「じさまあつ。」

むちゅうでじさまにしがみつこうとしたが、じさまはいない。

「ま、豆太、心配すんな。じさまは、ちよつとはらがいてえだけだ。」

まくら元で、くまみたいに体を丸めてうなっていたのは、じさまだった。

「じさまっ。」

こわくて、びつくらして、まめたはじさまにとびついた。けれども、じさまは、ころりとたたみに転げると、歯を食いしばって、ますますすごくなるだけだ。

「医者様を呼ばなくっちゃ。」

豆太は、小犬みたいに体を丸めて、表戸を体でふつとぼして走りだした。

ねまきのまんま。はだしで。半道もあるふもとの村まで^②。

外はすごい星で、月も出ていた。峠の下りの坂道は、一面の真っ白い霜で、雪みたいだった。霜が足にかみついた。足からは血が出た。豆太はなきなき走った。いたくて、寒くて、こわかったからなあ。

でも、大すきなじさまの死んじまうほ^③うが、もつとこわかったから、なきなきふもとの医者様へ走った。

これも、年よりじさまの医者様は、豆太からわけを聞くと、

「おう、おうー。」

と言って、ねんねこぼんでんに薬箱と豆太をおぶうと、真夜中のとうげ道を、えっちら、おっちら、じさまの小屋へ上ってきた。

① 「くまのうなり声」の正体はなんだったでしょう。

② 一回目の「じさまあつ。」と二回目の「じさまっ。」では、どんなちがいがありますか。読んで、そのちがいを表現しましょう。

③ 豆太は、どんなかっこうで走りだしましたか。

④ 「豆太はなきなき走った。」とありますが、豆太にとって、なにが一番こわかったのでしょうか。

⑤ 走っているときの豆太の気持ちを書きましょう。

三 モチモチの木⑤

登場人物の人がらや気持ちを考えながら読もう。

とちゅうで、月が出ているのに、雪がふり始めた。この冬はじめての雪だ。豆太は、そいつをねんねこの中から見た。

そして、医者様のこしを、足でドンドンけとばした。じさまが、なんだか死んじまいそうな気がしたからな。

豆太は、小屋へ入るとき、もう一つふしぎなものを見た。

「モチモチの木に、灯がついている。」

けれど、医者様は、
「あ、ほんとだ。まるで、灯がついたようだ。だども、あれは、とちの木の後ろにちようど月が出てきて、えだの間に星が光ってるんだ。そこに雪がふってるから、明かりがついたように見えるんだべ。」

と言って、小屋の中へ入ってしまった。だから、豆太は、その後は知らない。医者様のてつだいをして、かまどに薪をくべたり、湯をわかしたりなんたり、いそがしかったからな。

「弱虫でも、やさしけりや」

でも、次の朝、はらいたがなおって元気になったじさまは、医者様の帰った後で、こう言った。

「おまえは、山の神様の祭りを見たんだ。モチモチの木には、灯がついたんだ。おまえは、一人で、夜道を医者様を呼びに行けるほど、勇気のある子どもだったんだからな。自分で自分を弱虫だなんて思ふな。人間、やさしささえあれば、やらなきゃならねえことは、きつとやるものだ。それを見て、他人がびつくらするわけよ。は、は、は。」

「それでも、豆太は、じさまが元気になると、そのばんから、
「じさまあ。」

と、しょんべんにじさまを起こしたとき。

(光村図書「モチモチの木」より)

①「医者様のこしを、足でドンドンけとばした。」とありますが、これはどうしてですか。

② 医者様は、灯がついているモチモチの木をどのように説明していますか。

③「おまえは、山の神様の…」とありますが、豆太が、モチモチの木に灯がついたところを見ることができたのはなぜですか。

④「弱虫でも、やさしけりや」とありますが、この題にどのような言葉が続くか考えましょう。

弱虫でも、やさしけりや

いちばん心にのこったことを言葉で表そう。

① 次のようなないようで、心にのこったことをまとめましょう。

・ 題名

・ 作者名

・ いちばん心にのこったこと（自分の言葉で一言で表す）

・ どこを読んで、それが心にのこったのか（本文を引用）

〈れい〉

② 心にのこったことを言葉で表そう。

三年生をふり返ろう。

・一年間の出来事の中から、三つえらんであなたの三大ニュースを書きましょう。